

研究と連携 ―これまでの研究と今後の計画―

沼田善子先生

文芸・言語専攻 応用言語学領域 2年

田中佑

5月9日に筑波大学で行われた沼田善子先生の御講義「研究と連携 ―これまでの研究と今後の計画―」を以下にまとめると共に、関連して考えたことを記す。

「日本語に関する研究」と一言に言っても、そこには多くのアプローチが存在する。研究対象からの視点で言えば、「現代語研究」「方言研究」「歴史的研究」があり、方法論からの視点を取れば「記述的研究」「理論論的研究」、また視点を少し広く取れば他言語との「対照研究」なども挙げることができる。大きくは「日本語に関する研究」として一致する一方で、フィールドを異にしているこれらの研究は、用語や研究手法に関しても、大きな違いがあると言える。しかし、これらアプローチを異にする研究領域が手を取り合う形である対象の分析を進めることができたなら、研究上の利点は大きい。これが共同研究である。たとえば、「現代語研究」と「通時的的研究」が連携したら現代語を変化の中で動的に捉えることが可能となり、現代語の体系を総合的に理解することができる（但し、現代語の体系と通時的データの関連に関しては注意が必要である）。また、「通時的的研究」と「方言研究」が連携すれば、通時的データの欠落を方言が補い、古典語の体系や言語変化の様相を的確に捉えることが可能となる。つまり、相互に不足する部分を補うことで、傍証としての扱いであっても、見えてくるもの、新たな視点等、得るものは多いのである。

上述の部分は異なるアプローチを採用する研究領域が共同研究を行った場合の利点である。しかし、アプローチが異なる研究領域間に存在する壁は簡単に越えられるものではない。たとえば、データの扱い方や分析の観点、概念・用語の設定など、上述の利益を得るために越えなければならない壁は予想以上に多い。しかし、これらが絶対に越えられない壁なのかと言えば、そうではない。沼田先生はこれらを乗り越える方法として、御自身の経験から「研究目的の明確な認識の共有」「概念、分析観点のすりあわせ」「ゆるやかな協同」、そして「他領域・他分野の成果を自己の見方に換言し、還元すること」を挙げる。

沼田先生のお話は以上を踏まえた形で今後の研究計画に入るが、研究計画であるため、ここでは立ち入らないこととする。

沼田先生のお話のうち、アプローチ間の相違点などに関しては研究における基礎であるが、共時的分析に通時的観点を取り入れようとする筆者にとっては、研究上の留意点の再認識という形で非常にためになった。また、先生ご自身の経験に基づくお話は、今後共同研究の可能性を大いに持つ我々にとって、貴重なお話となった。以上で学んだことを常に意識下に置き、最後にあった沼田先生の指導学生に対する厳しくも優しいお言葉に応えられるよう、今後とも研究に励んでいきたい。

沼田先生のお話の概要と感想

日本語研究における連携は三つのアプローチに分けることができる。一つは、現代語研究、方言研究と歴史的研究というアプローチである。この研究連携の大きなメリットは、互いに分析したり材料を収集したり情報を比較したりすることによって、日本語における現象のより総合的な理解ができることである。もう一つは、記述的研究と理論的研究であり、記述を再考したり捉えなおしたりするアプローチである。最後は、対照研究というアプローチであり、他言語との対照から研究対象の普遍的側面と個別言語的側面を明らかにできる。しかし、共同研究とはそんな簡単なものではなく、乗り越えなければならない問題が沢山ある。まず、研究者によって研究手法が違っており、データの扱いまたは分析の視点を前もって互いにあきらかにする必要がある。そして、基本的概念あるいは用語も異なっているので、事前にそれらを設定しなければならない。結果として、共同研究を行うための重要な条件として、研究目的の明確な認識の共有、そして概念または分析視点のすりあわせが必要になる。

日仏語対照研究を行っている私は、沼田先生のお話から特に大きなインパクトを受けた。共同研究を行う際には互いの用語、研究対象、研究目的をきちんと設定しておかなければならない。それは研究自体より大きな問題だということがよく理解できた。何より用語の設定が大変難しいと思う。フランスから日本語学を勉強しに来た私にとって、日本語学で使われている専門的用語をマスタするのが大きな課題であった。なぜなら、それらはフランス語学の用語と全く関係がなかったからである。言語学の世界では、同じ現象を記述しようとするのに、アプローチによって分析のやり方や用語が異なる。そのことに充分配慮すべきだと思う。

沼田義子先生の「研究と連携—これまでの研究と今後の計画—」を聞いて考えたこと

文芸・言語専攻 応用言語学領域 4年 許 挺傑

本日は、沼田先生が「研究と連携」というテーマでお話してくださいましたが、非常に共感するところが多く、大変興味深く聞かせていただきました。

本日の発表の中では、主に先生のこれまでの研究とこれからの研究という二つの部分があったと思います。これまでの研究はもちろん、これからの研究の部分で現在の自分にとって研究を進める上で非常に大きなヒントをいただいたような気がしてなりません。

たとえば、他の研究領域の研究者との連携で研究を進める場合、非常に大きな壁として次のようなことがあるといます。研究手法、データの扱い、分析の観点などの違い、さらに、立場の違い、基本的な概念や用語の設定などの違いなど、実にさまざまな障害があるわけです。

実は他領域の研究者との共同研究を進める場合のみならず、一人の研究者が異分野融合的な研究を進める場合においても、実は以上のような障害は十分に生じるのではないかと思います。もしかしたら共同研究の場合よりも、一人の研究で異分野融合的な研究を進める場合のほうが、より大きな障害となりうるのではないのでしょうか。

というのは、共同研究の場合、研究者それぞれ研究領域は違えど、それぞれ各自の担当領域があるわけであり、さらに本を出版する際には、また各自で論文を書くわけであるため、障害が生じて、最終的には一冊の本にそれぞれの見解が共存することができます。しかし、一人の研究者が異分野融合的な研究を進める場合においては、一つの論文の中に複数の異なる結論を述べるわけにもいかないですし、性質の異なる手法を何の検討もせずに研究手法として利用するわけにも行かないのではないかと思います。だから異分野融合的な研究を進めることは難しいと言えるのかもしれない。

それでは、どうしたらこの問題を解決することができるのでしょうか。本日の沼田先生の発表にはヒントとなるものが示されたと思います。それは「他領域、異分野の成果を自己の見方に換言し、還元する」ということです。

自分の研究とは違う研究手法で出された他領域・異分野の成果をそのまま無修正の状態ですべて自分の研究領域に持ち込むことは非常に危険なことであると思われます。しかし、他領域・異分野の成果を自分の見方で再観察し、自分の専門用語で再構築し、さらに、再構築したものを自分の研究に応用することができれば、異分野融合の研究を進めることも無理ではなくなるような気がします。

ここで重要な点は、他領域・異分野の成果をいかにして、自分の見方に換言し、還元することができるかということでしょう。しかし「他領域、異分野の成果を自己の見方に換言し、還元する」能力は一朝一夕で習得できるものではありません。その能力を身に着けるためにはかなりの訓練が必要不可欠だと思います。

1. はじめに

本講義は、研究と連携というテーマで、特に日本語研究における連携について述べられたものである。講義は、沼田先生がこれまでされてきた研究連携を概観し、共同研究の利点と問題点について触れた後、今後の研究計画について紹介するという流れで行われた。ここでは、講義の内容を概観した後、本講義に対する筆者の意見を述べることにする。

2. 授業の概観

これまで日本語研究における連携の形は、現代語の体系を方言資料や古代語の体系を分析観点に入れることで通時的観点から捉える形と、記述研究の成果を言語理論で捉えなおすような記述的研究と理論的研究の融合した形、日本語と他の言語の共通点・相違点を探ることに重点を置く対照研究などがある。中でも、現代語研究・方言研究・歴史的研究が連携された研究は特に重要な位置づけになる。現代語だけを分析、考察することで看過されやすい諸問題を、古代語や方言を分析することによって解決し、現代語の研究を深めることができる。

このように、日本語を研究することにおいて、異なる視点から多角的に、広く捉えることが研究の質を深めるためにも必要不可欠であるが、異なる視点を持つ研究を融合していくためには、一人の研究者では難しく、共同研究という形で研究を進めることとなる。しかし、共同研究は研究者間の立場の違いや研究手法の違いというような問題も立ち上がるため、研究目的を明確に意識し、共有することや概念・分析観点を調整していくなどといった努力を伴わなければいけない。

以上のことを踏まえ、沼田先生の今後の研究の計画は、「高度な国際コミュニケーション能力開発のための言語研究」を目指した新プロジェクトで、その具体的な活動として、中国の大学との連携し、合同セミナーを開催している。この活動は、研究と教育の連携体制を確立、強化することで、交流から連携へとというに繋がることとなる。

3. 意見

筆者は、本講義で言及された筑波大学の新研究プロジェクトの一環として、2010年11月に中国の北京で開かれた「中国人民大学・北京大学・筑波大学 日本語言語学フォーラム」に参加し、研究発表を行った。そこで、筆者の指導教官である小野正樹先生と、対照研究と立場から日韓モダリティ表現の焦点構造について発表したが、筆者にとってはまさにここが連携した研究の第一歩であると考え。また、研究内容としては日韓の対照研究であったが、その成果を中国で報告することで、様々な角度から議論ができたと思筆者は感じた。また、言語研究と文学研究が連携することで、まさに多面的、多角的、包括的な研究に拡大することができたと思筆者は感じた。今後、さらに連携した研究を進めていくために、筆者に残された課題として、良い研究パートナーを探すことが必要であると思筆者は感じた。

沼田先生のお話の概要

日本語研究における連携は現代語研究、方言研究、歴史的研究という三つのグループに分けられる。連携で研究を進めるのはお互いの不足の部分を補って、よりよい研究成果を出すためである。

現代日本語の研究には現代語だけを研究対象にすると説明しきれない部分がある。そのために、現代日本語の元となる近世の方言、あるいはもっと遡って、中世などの日本語から答えを求める必要がある。

しかし、一人の研究者には限界もあるし、向き不向きというものもある。したがって、現代語研究を行っている人は、方言研究、歴史的研究を行っている人と連携することで、自分の限界を超えた分野での研究も可能となる。お互いの研究成果を交換し、意見を交わすことで、これまで一人ではたどり着けなかった結論にたどり着くことができる。

ただ、歴史的研究は現代語研究と違って、文献だけが論証の拠り所となっているため、文献以外の生の資料を重要視しない傾向がある。現代語研究者と歴史的研究を行っている人が共同に研究を進めるとき、資料の扱い方が異なっているため、お互いの意見の調整も大事である。

個人の感想

沼田先生のおっしゃるとおりに、歴史を研究する人は史料だけを重要視する傾向がある。近現代以前の歴史研究は文献や史料だけが頼りになっているため、その傾向が一層強くなる。

近現代の歴史研究では生き証人がまだ数多くいるため、「オーラル・ヒストリー」と言って、その時代を生きてきた人々から直接に話を聞きだし、記録しておくこともできる。

ただし、史料にせよ、オーラル・ヒストリーにせよ、どちらも検証が必要である。史料の場合は、書いた人、書いた日にち、書いた目的によってその信憑性が変わる。またその史料自体が偽造されたものもありうるため、扱うときには細心の注意を要する。オーラル・ヒストリーの場合は、話し手が冷静に過去に起きたことを振り返るとは限らない。また、話し手の当時の立場、職務などによって話の信憑性も変わる。その上、思い込み、勘違い、記憶違いなどの可能性もあるため、史料と同じく細心の注意を要する。

結局、史料があったところで、その裏を読み取る力を備えていなければ、宝の持ち腐れとなる。いま他の人の論文などを読んで、日々痛感している。